

# 思考力・表現力を育む授業づくり

～新聞・ICTの活用を通して～

関川村立関川小学校

## 1 学校の概要

「六三三制」発祥の地である関川村。この地にある関川小学校は、村内5小学校を統合し、平成22年4月に開校した。本年度、創立7年目を迎える。

当校では、ICTを活用した授業が日々行われている。平成23年度より、NTT東日本の支援を受けながらICT活用教育を推進してきた。今では、全学級に「電子黒板」「書画カメラ」「授業用コンピュータ」が配置され、「校内LAN」も整備されている。主要4教科のデジタル教科書も完備されているため、各担任が授業でICTを使いたい時に、いつでも使える素晴らしい環境が整っている。

また、5年生は学校田で育てた米を「米沢街道まつり」で販売、6年生は「国の重要文化財 渡邊邸」の観光ボランティアガイドなども行っている。様々な教育活動において、“地域とつながり、地域に学び、地域に発信する”ことを大切にし、ふるさと関川を誇りに思う子どもの育成を目指している。

## 2 NIE実践のねらい

### (1) 研究主題設定の理由

昨年度まで、ICTを効果的に活用した授業づくりを核とし、「見通しをもって考え、伝え合う子どもの育成」を目指して研究を進めてきた。課題提示や思考活動の時に、ICT機器で効果的に画像や映像等を活用し、タブレットやテックキャンバスを使用し、考えの共有を図ってきた。子どもたちの学習意欲の喚起や多様な考え方の習得など、一定の成果が上がったが、考えの根拠を明らかにして述べたり記述したりする力の個人差が大きく、学校全体としての取組の必要性が課題であった。

当校の授業スタイルとしてICT活用は欠かせないため、学年の発達段階に合わせICT活用も取り入れた授業づくりを目指す。新聞やICTを授業のどの場面でのように活用すれば、子どもたちの思考力や表現力を育むことができるのか日々の授業実践及び研究授業をベースに取り組むこととした。

### (2) NIE実践1年目で目指す子どもの姿と研究内容

#### 《目指す子どもの姿》

関わり合いを深め、自分の考えや思いを表現できる子ども

子どもたちが主体的に学習に取り組める学習課題を設定し、学習素材から得た情報を関連付けながら解釈、分析したり、根拠や理由を明確にして自分の言葉で説明したり書いたりできる子どもを目指す。加えて、新聞記事や写真、映像、パンフレ

ットなどを含む資料との関わりからの気づきを大事にし、互いの考えを伝え合い、自分の考えやみんなの考えを発展させるような関わりを意識した話し合い活動ができる姿も期待したい。

《研究内容》

- ① 思考力や表現力を育むための、課題設定や見通しのもとせ方
- ② 新聞やICTを効果的に活用し、対象（人・もの・こと）と関わりながら、思考力、表現力を育む言語活動

### 3 本年度実践の概要

#### (1) N I Eコーナーの設置



児童玄関付近の畳がある一角を、N I Eコーナーとして子どもたちがいつでも新聞を読める場所とした。昼休みや下校時に新聞を手に取り、興味のある記事を友達と一緒に読む姿がたくさん見られた。また、自宅にはない新聞に興味を示す子どもも少なくない。複数の新聞を設置できることは、同じ記事の比較や記事の扱いの大きさなど、一紙ではなかなか気づきにくいことに目を向けることができた。

また、各学年のN I Eタイムの取組の様子や、関川村に関する記事、子ども新聞からのクイズなどを掲示し、少しでも新聞に興味をわくような環境づくりに努めた。

#### (2) 全校一斉のN I Eタイムを、木曜日の朝学習時に月2回実施

	取組内容	成果
低学年	<ul style="list-style-type: none"> <li>○新聞の種類や、新聞の扱い方などの初期指導。</li> <li>○「カタカナ」や「季節の言葉」探し。 ➡ 文作りや俳句作りに発展させる。</li> <li>○子ども新聞の迷路や間違い探しなどのクイズ。</li> <li>○気に入った写真に題名付け。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎新聞に対する関心が高まり、自分たちにも楽しめるものであることが分かった。</li> <li>◎写真だけに向いていた興味が、記事の中身を読もうとする意欲に高まった。家庭で、家族と一緒に読む子どもも見られるようになった。</li> </ul>



低学年の初期指導は、電子黒板に紙面を大きく映し出し、どこにどんな記事が書いてあるか、みんなで確認する場が効果的！



<p>中 学 年</p>	<p>○新聞記事を読んでから「新聞穴埋めクイズ」にチャレンジ。(新聞記事をスキャンして作成) ○新聞しりとり。 ○新聞スクラップ。 ○新聞記事からクイズ作り。 ➡ 難易度を変えることで、集中して記事の内容を読み深めていくことができる。</p> 	<p>◎タイムリーな記事を選択することで、暮らしの行事や出来事への関心が高まった。 ◎楽しみながら様々な語句に触れることで、言葉への関心が広がった。 ◎分からない言葉は辞書で調べるなどし、語彙力が増えた。 ◎スクラップを通し、共通の話題が増え、子ども同士の関わり合いが広がった。</p>
<p>高 学 年</p>	<p>○新聞記事の要約文と感想文書き。 ○写真を見て、詩で表現。 ○日直の「今日のニュース」発表。 ○新聞スクラップ。 ○おすすめ記事発表。 ○同じ記事での意見交換。</p> 	<p>◎進んで新聞に触れ、様々な新聞記事を読もうとする姿が増えた。 ◎選択した記事の要約文や感想を、スムーズに書くことができるようになった。 ◎おすすめ記事発表では、意見交換をすることで子どもの世界が広がってきた。 ◎興味をもった記事が見つかるまで、いろいろな新聞を読もうとする姿が見られた。 ◎同じ記事を介して、様々な見方や考え方の交流ができた。</p>

### (3) 委員会とのタイアップ

エコJRC委員会では、「MY記事コーナー」で気に入った新聞スクラップを紹介した。全校児童にタイムリーな記事の内容と自分の感想を伝え、新聞に対する興味や関心を広げる活動を行った。



放送委員会では、毎週火曜日の昼の放送で「とっておきの記事紹介」、毎週金曜日に「ことわざクイズ」を行っている。子ども新聞「ふむふむ」や朝日子ども新聞など、新聞の出所を明らかにすることで、みんながその新聞をまた読んでみたくなるような内容を心掛けている。また低学年にも分かるように、ことわざの一部分を三択にしてクイズ形式にするなどの工夫をしている。

#### (4) 新聞への積極的な投書

「親子でチャレンジ！小学生夏休み新聞スクラップ」への希望者の参加を呼び掛けた。全校で5名だったが、NIEコーナーに作品を展示したところ、大勢の子どもが興味関心を示し、何度も読む姿が見られた。来年度は全校で取り組んでいく。

また、高学年では、国語の学習で書いた意見文や短歌を新潟日報に投書した。採用される喜びとともに周囲の子どもたちも友達の名前や関川の地名が掲載されることで、より新聞を身近に感じるようになった。



### 4 授業実践例

**実践1** 第2学年 国語科 ことばについて考えよう  
「ようすをあらわすことば」～ことばのたからばこを作ろう

#### 【本单元における新聞やICTの活用】

- ① 学習に興味をもたせるため、単元の導入で「言葉当てクイズ」を行う。新聞から選んだ記事や4コマ漫画などを提示し、そこに書かれている擬態語・形容詞・比喻などの言葉を隠して、どんな言葉が書かれているかを当てる。単に正解を求めるのではなく、たくさんの言葉を考えさせ興味をもたせる。
- ② 新聞記事から見つけた「3種類の様子を表す言葉」を友達同士で紹介し合う。
- ③ 新聞記事の3枚の写真を見て、写真に合うように、様子を表す言葉を使って文を作る。(本時)
- ④ 選択した写真を書画カメラで大きく映し出し、どの部分からそう考えたのか、電子黒板の前で子どもが説明する場を設ける。(本時)

#### (1) 本時のねらい

新聞記事の写真を見て、様子を表す3つの言い方を使い、語と語のつながりが正しい文を書くことができる。

## (2) 指導の構想

### ① 思考力や表現力を育むための課題設定や見通しのもとせ方

教科書で扱う3つの様子を表す言葉を、五味太郎「言葉図鑑」を参考にし、ア：擬態語や擬声語を表す「様子の言葉」イ：形容詞や副詞を表す「飾る言葉」ウ：比喻表現の「例えの言葉」に分類する。これらを3色で色分けして掲示し、視覚的に捉えやすくする。子どもが文を書く付箋用紙も同じ色分けをし、自分が使おうと思う表現方法について、見通しをもたせる。

### ② 新聞やICTを効果的に活用し、対象（人・もの・こと）と関わりながら、思考力、表現力を育む言語活動

児童の関わり合いが生まれるためには、「伝え合いたい」という思いをもたせることが大切である。発表会では新聞記事から、興味を引く写真を提示する。(書画カメラで拡大) 季節感のあるもので対象がはっきりした分かりやすいもの(風景・動物)の写真3枚を提示し、自分が選んだ写真の文を書く。また、予め写真を見せ、発表する文を考えさせることで、児童全員が、自信をもって意欲的に参加できるようにする。

また、伝えるだけでなく「伝え合い」が生じるために、友達の考えを聞いて感想を言ったり、3つの表現の仲間分けをしたりする活動を行う。その際「～と同じ(似ている)」なのか「～と違う」のかという見方や、「～と思う。わけは～だからです。」のようにどうしてそう思うのかを伝える姿を期待したい。

## (3) 授業の実際

NIEタイムの取り組みや日常の活動で新聞に親しんでいたため、新聞を使った単元の導入では、児童の興味関心を高めた。「新聞の写真を見て文を考え『ことばのたからばこ』の発表会をする」という単元の見通しをもって取り組んだことが効果的であった。



スノーダーザー:新潟日報  
2003年4月2日掲載



地獄谷サル:新潟日報  
2013年2月5日掲載



つらら:苫小牧民報  
2017年1月10日掲載

本時では、季節感のある写真(上の3枚)を選んだことで、教科書の絵とは違う、新聞ならではの「リアルタイム」の良さがあった。また、自分で興味を引く写真を選んだことにより、表現しようとする意欲が高まった。

既習事項の学習を生かした3色の付箋も、様子を表す3つの表現の手掛かりとなっていた。手元にも提示した同じ写真のミニ版を配付したことも写真の細部まで見ながら書くことができ、全員が3種類の表現で、写真の様子を表現することができ

た。つららの写真では、「つららが、キラキラ輝いている。」「つららが、びっしりならんでいる。」「つららが悪魔の牙のようだ。」、スノーダーザーの写真では、「雪がどんだん削られてる。」「スノーダーザーが激しく雪を飛ばしている。」「スノーダーザーが虹のように雪を出している。」など、実に多彩な表現が見られた。3つの写真にしたことで、互いに発表し合っているような表現に触れることができ、児童にとって有意義な発表会となった。

本時では、写真のみを提示してその写真については授業者が説明をするだけであったが、最低限の必要な情報を記事や見出しから取り出して児童に与えることが有効な場合もある。例えば、「スノーダーザー」の写真では、春先の真っ青な空と雪の白さの対比を伝えたいという撮影者の意図がある。ただ写真のみを提示すると、除雪の様子にしか目が向かないが、見出しの言葉を見せることで季節が春であることが分かり、見方も変わってくるかもしれない。

写真の活用については、ねらいに応じて見出しや記事があると効果的な場合がある。授業でねらうものは何かを明確にして、活用していきたい。



**実践2** 第6学年 国語科 意見を聞いて考えを深め、意見文を書こう  
「未来がよりよくあるために」

**【本單元における新聞やICTの活用】**

- ① 関川村の現状や、現在役場で「人口定着のために取り組んでいること」が分かる資料（関川村広報誌）に、自分なりにポイントと考える部分に線を引きながら読ませる。
- ② 新聞の投書欄にある意見文と、その文章を教師が改作した意見文を比較させ、分かりやすい文章を書くためのポイントを考える。その際タブレットに意見文の写真を貼り付け、改作意見文は紙媒体とし、タブレットに線を引いたり書き込んだりして比較しやすくする。

**(1) 本時のねらい**

新聞投書欄意見文と教師が改作した意見文を比べて読み、効果的に書いて伝えるためのポイントを考え、「はじめ」の部分を書くことができる。

**(2) 指導の構想**

**① 思考力や表現力を育むための課題設定や見通しのもとせ方**

まず、「この意見文を先生が少し直しました。もし、こんな風には書いたら、分かり

やすく伝わるかな。」と投げかけ、紙媒体の改作意見文を教師と一緒に読む。その後に配布した意見文を読ませ、比較させる。

児童は「投書欄意見文の方がよく伝わる。」と感じるだろう。そこで「投書欄意見文の書き方の良さを見付けよう。」と投げかけ、タブレットに線を引かせたりポイントを書き込んだりさせる。

② 新聞やICTを効果的に活用し、対象（人・もの・こと）と関わりながら、思考力、表現力を育む言語活動

投書欄意見文の書き方の良さを書いた児童から、随時意見交換を行わせる。全体での発表の前に、様々な友達と意見交換することにより、おおまかな意見が分かり、安心して全体発表にいくことができるだろう。

また、タブレットに書き込まれた個々の考えを電子黒板上に一斉に写し（アプリ：テックキャンバスを使用）、投書欄意見文の良さをみんなで共有する。

その後、児童が新聞投書欄から考えた書き方の良さ（会話文から・気持ちが伝わるように・一文を短く）をつかって、さっそく「はじめ」の部分のみを書く。

その際、「その提案内容が実現した2060年の関川村」を想像させる。出てくる人・見える物・出てくる人が話していることなどを想像させることで、「はじめ」の部分が描写しやすくなると考えた。

### （3）授業の実際

新聞投書欄に掲載された同年代の子どもの意見文を拡大コピーで提示後、「この意見文を先生が少し直しました。もし、こんな風には書いたら、分かりやすく伝わるかな。」と投げ掛け、紙媒体の改作意見文を読ませた。子どもたちは、「投書欄意見文の方がよく伝わる。」「先生が直したものは、よく伝わらない。」と感じていた。

そこで、「投書欄意見文の書き方の良さを見付けよう。」と投げ掛け、デジタルデータ化した投書欄意見文を個々のタブレットに配信し、二つを比較させた。子どもたちは、タブレット上の投書欄意見文に線を引いたりポイントを書き込んだりしながら、良さを見付けていった。子どもたちは「説明だけでなく、一文を短くしたり会話文を入れたりすることで、分かりやすく引き付ける書き方になる」ことに気付くことができた。



「はじめ」の部分を書かせる場面では、筆の進み方の個人差が大きかった。進まなかった原因は、具体的な場面が想像できないことであった。投書欄意見文を参考にできるように、タブレットを机上に置いたこと・できた児童数人に発表させ参考にさせたこと・教師のモデル文をヒントにさせたことなど、いくつかの手立てがあいまって全員書くことができた。

投書欄に掲載された意見文は、良い書き方の宝庫であった。加えて「同年代の子どもの書いたもの」ということで、教材である意見文を身近に感じさせ「書き方の

良さを見付けよう。」という意欲を引き出すのに効果的であった。また、教師改作の意見文を思い切り悪文にして比較させることで、教師が考えていた「書き方の良さ」に気付かせることができた。



## 5 授業実践における成果と課題

### (1) 成果

- 新聞に対する親しみがまだ薄い低学年には、子どもたちの興味関心を引くような記事や写真を選択することで、学習意欲の持続とねらいの達成を図ることができる。特に、写真選択の際には、季節感や色彩、見た目のインパクトなど、ねらいに即してよく吟味することでより成果が上がる。
- 単元のゴールを示し学習活動内容が明確になった時、新聞の記事やグラフ、様々なデータを活用することで、自分の学習に役立つことを実感できた。そこで学んだことを、その後の学習にも生かす姿がたくさん見られた。
- 少しずつ子どもたちの語彙力が増え、言葉が豊かになった。作文の字数も多く書けるようになり、表現豊かな内容を書く子どもが増えてきている。
- 新聞スクラップでの意見交換や授業などでいろいろな見方や考え方に触れ、子どもの世界観や視野がぐんと広がった。

### (2) 課題

- ▲ 授業のねらいに合った記事の選択が、その授業の善し悪しを決定づけるほど、重要である。私たち教師が日頃からアンテナを高くして、いろいろな記事をストックして活用できるようにする。
- ▲ 写真の活用については、写真のみの使用もできるが、ねらいに応じて見出しや記事も一緒に提示するといいい場合がある。授業のねらいを明確にするで、どの活用方法が適しているのか、見極めることが大切である。
- ▲ ICT 機器の充実した環境を更に生かして、新聞記事や見出し、写真などの提示のタイミングや提示の仕方を工夫する。
- ▲ 必要な新聞記事は、1枚とは限らない。考えの変容や思考を深めるために複数枚の提示の必要性も視野に入れた授業構成を考える。